

に県庁の2人の常置委員も同行した。また持永飽託郡長と田口文書課長は先発して同地に至り一行を港頭の浦島屋で待ち合わせた。暫時休憩して一同港頭を巡視したが、田口文書課長は停車場の設置場所や棧橋のことについてシュタインに質問し、シュタインは詳細に答えた。

その後で、小林宇土郡警察署長の案内で水上警察用のボートに乗り港内を縦横に漕ぎまわった。それからまた上陸、その晩は三角に一泊した。翌25日午前8時シュタインは長崎より同伴した吉瀬愉逸と共に前夜入港した汽船に乗り込んだ。一同もみな小船に乗って港口まで見送り名残を惜しんだ。吉瀬愉逸という人は長崎県の外事課員で英仏語をよくし、いつも外国人が来朝し長崎に上陸する時は、県庁より派遣されて接待の任に当たっていた。今回も彼は特に長崎県庁の命を受けシュタインと同伴して佐賀を経て熊本まで来て、また長崎まで伴い帰ったのである。この度のシュタインの来熊については、吉田兵事課長が万事熱心に世話をしたのでシュタインは課長の厚意に大変感謝したという。

以上、主として『紫溟新報』の記事によって述べたが、このようにシュタインの滞熊中のことを具に報じている。いずれにせよ、彼は熊本で丁重にもてなされ世話を受けている。その理由としてエルンスト・シュタインが日本でも有名な碩学ローレンツ・フォン・シュタインの子息であったこと、しかも彼は法律のみならず鉄道事業などの専門知識を持っていたこと、そして明治20年頃の熊本ではまだ西洋人は非常に珍しかったことが挙げられる。

石橋忍月のドイツ語修業とレッシング論



石橋忍月

明治20年代の初めに、森鷗外と共にドイツ派の文芸評論家として盛んに活躍したことで知られる石橋忍月（本名・石橋友吉、1865-1926）であるが、その活動の根拠となったドイツ語の習得過程については従来余り知られていなかった。最近、八木書店から刊行された『石橋忍月全集』（全四巻）の補巻には忍月の詳細な年譜（千葉眞郎作成）が収められている。それによると忍月は明治13年（1880）、数え歳16の時、郷里の福岡を去り上京し、本郷区台町（現・文京区5丁目）の私立独逸学校に入学している。この独逸学校は明治11年に東大医学部予科の独語教員であった山村一藏によって設立されたものである。当時東大医学部入学のための予備校的性格が強かったドイツ語学校で、医学志望者を中心として多くの生徒を集めていた。従って該校に入学したということは

は、忍月は当初、将来は医者になるつもりでいたと見てよいであろう。彼の福岡県八女の実家は代々医者であり、また養子先も医者であったことを思い合わせると、そう考えて間違いのないであろう。だが直には、彼は東大医学部予科には進まなかった。彼は独逸学校に学んだ後、今度は東京外国語学校独語科に進学している。本格的にドイツ語を学ぶためだったと思われる。明治10年代のドイツ語教育で最も重要な役割を担ったのが東大医学部予科とこの東京外国語学

校（通常、旧東京外国語学校と呼ばれる。）独語科であった。当時の『東京外国語学校一覧』（一橋大学附属図書館蔵）に「石橋友吉」の名が見られる。それは『東京外国語学校一覧』（明治13年、14年）においてであって、独語科「下等第六級生乙」に編入されている。独語科の課程は仏語科、露語科などと同様に5学年であって、上下等に分かれ、下等が3年、上等が2年と定められた。そして下等は6級に、上等は4級に分かれていた。従って忍月が最初属した「下等第六級」というのは最下級であって、改めて初歩から学び始めた。これから判断すると、独逸学校に学んだのはごく短期間であったようだ。さて、

「下等第六級」の課程は次の通り。

綴字（1周5時間）：ボック第一読本により単語を綴らせる。

読法（同5時間）：ボック第一読本の簡単な文の読み方を授ける。

習字（同4時間）：運筆法及び大小文字の筆写体を学習する。

訳文（同4時間）：ボック第一読本について文意の訳を授ける。

外に算術が6時間、国書（史記、論語、文章規範、日本外史などの輪読や購読及び属文）と体操がそれぞれ3時間あった。算術はしばしばドイツ語で教えた。

こうして忍月は東京外語でドイツ語の基礎を修めたわけだが、次の『東京外国語学校一覧』（明治14年、15年）にはもう彼の名はない。彼はその後、東大医学部予科に移った。『東京大学医学部一覧』（明治14、15年）を見ると、「予科四等生徒甲」欄に彼の名前がある。予科ではドイツ語が最重要科目であったので、その勉強に明け暮れたであろう。その後は年譜によると、明治16年頃から山田喜之助の書生となっていた。山田は明治15年東大法学部（英法）の卒業で、当時京橋区出雲町で代言人をしていたという。彼は後には小野梓や高田早苗らと立憲改進黨の結成に参加し、また衆議院議員にもなった。忍月はこの山田に感化されて法律家をを目指すことになったのではあるまいか。そして明治17年9月、東京大学予備門の「前本饗第二年（第二級）」に編入となり勉学を続けた。同年7月、東京大学予備門本饗が分饗（医学部予科の後身）を吸収し、本饗と分饗の区別を廃止した。次いで忍月は明治18年9月、予備門の「前本饗第三年（第一級）」に進級。だが、同20年3月東京大学は帝国大学と改称。4月それに伴い東京大学予備門は第一高等中学校と改称、同年7月、忍月はその本科第二年に編入。『第一高等中学校一覧』（明治19年至20年）を見ると、「法科第二年」（独）のクラスに20人が挙げられているが、その中に「石橋友吉」の名もある。これは帝国大学入学後の専攻分野に応じた編成であった。そして一高の同窓会名簿に記されているように、忍月は明治20年7月、湯川寛吉、天野喜之助らと共に第一高等中学校の独法科を卒業した。

忍月が学んだ頃の大学予備門及び第一高等中学校のドイツ語教師には、川上正光、吉田謙次郎、中俣匡、山口小太郎、オットー・ゼン、レーマン、プッチールといった人々がいた。

忍月は1887年（明治20）9月、予定のコースである帝国大学法科大学法律学科独逸部に入学した。1年後これは、同法科大学法律学科第三部（独逸法）と改称された。課程は3年制で、英語の授業以外の、法律に関する諸科目はすべて独逸法律の講習で占められていた。だが忍月はこの頃から文芸評論家として盛んに活躍するようになり、文壇でも知られた。明治22年4月の『国民の友』附録の愛読書アンケート「書目十種」に、レッスングのラオコーン、クルーゲ編纂の大家詩集、ヴィルマルの独逸文学史、ケエニヒ独逸文学史を挙げた。文学活動に熱中し

たためであろうか、同年6月末の大学の法律学科学年試験に落第し、第二年に停級。ために卒業したのは明治24年7月であった。

鷗外のドイツ語修業は明治初年の私塾に始まり、その後東京医学校、東大医学部と順調に進み、さらに留学によって一層磨きがかけられた。しかもその語学力は読む・書く両面において極めて高度に達しており、会話も相当出来たようだ。これに対し忍月の場合、ドイツ語を学び始めたのが16歳の時とかなり遅く、その後も中断があったりして一貫性に欠けるところがあった。しかも彼の語学は専ら本を読むことに限られていた。同じドイツ派といわれながら、両者のこの語学力の差が、鷗外には目覚ましい活躍を可能にし、忍月には早く文壇から遠ざかる原因ともなった。

忍月が評論や翻訳の対象にしたドイツ文学は、レッシング、ゲーテ、シラーなどが主であるが、今度の忍月全集第二巻には少数ながら訳詩も収められている。シラー、ゲーテの詩と並んでリュッケルト、ボーデンシュテット、レーナウなどの作品も訳しているのである。そして驚いたことに、有名な独逸国歌「世界に冠たるドイツ」(ホフマン・フォン・ファラースレーベン作)も訳している。明治22年(1889)4月22日発行『国民之友』に「独逸人の歌」と題して発表したもので、当時忍月は東大独法科の学生であった。周知のようにこの歌は3節から成るが、ここでは参考までに、今日でもドイツ国歌として歌われている第三節を紹介してみよう。「一致、正理、自由。是れ実に独乙祖国の為にあるなり。吾人は宜しく之を進取すべし。各人の手と心を兄妹として！一致、正理、自由。是れ実に福祉の基なり。福祉は一部の社会に華くな！全独乙祖国のために華けよ！」

忍月は同じ頃憲法発布の盛典に感激し、ドイツの愛国詩人アルントの独逸祖国の歌に倣い「日本祖国の歌」を作り、祝意を表している。このように忍月がドイツの愛国詩人たちの詩を愛読し、訳したりして共鳴を示しているのは、当時のドイツ語教科書の影響であろう。当時最も広く用いられたヘステル読本やボック読本などの教科書にはドイツの愛国詩や教訓的短章がしばしば登場した。忍月はドイツ語を勉強する際に、そうした作品に出会ったと考えられる。

だが、忍月が最も愛読し、高く評価したのは、近代ドイツ文学の基礎を築いた偉大な批評家で劇作家のレッシングであった。それは前述の『国民之友』の愛読書アンケート「書目十種」に答えてレッシングのラオコーンをその一つに挙げていることに端的に示されている。忍月のレッシング関係の著作には「レッシング論」(『国民之友』明22・3)「独乙文学ノ三幅対」(『しがらみ草紙』明23・1)「レッシングの譬論談」(『少年園』明22・11~12)「烈真具の比喩談」(『国民之友』明26・8)がある。「レッシング論」はその代表的評論で、最初に略伝を述べた後、批評家としてのレッシングを論じている。忍月によればレッシングは詩人としてよりも批評家として最大の長所があり「氏の全生涯は心理の探求と虚言空言の攻撃」にあった。そして「氏の文章は刀の如く鋭利」で「眼光は針尖の小をも猶ほ区別」できた。その思考は深く明晰で、論法は厳密であった。「氏は大胆なる正直なる批評家なり。其批評するに当っては真理あるを知って人あるを知らず。」故にクライスト、グライムなどの親友でも容赦しなかったし、ゴットシェット、ヴィーラント、クロプシュトックなどの大家に対しても躊躇しなかった。彼の『文学書簡』を読めばその一斑が伺われるであろう。代表作は『ラオコーン』と『ハンブルク演劇論』だが、前書中に「詩は談話する画にして画は沈黙する詩なり」と言っているのは、千古の

金言だ。また「画と詩は其淵源目的結果互に相同じと雖も、画は己れを場所に置き、詩は己れを時に置く。画は形と色とによりて顕はれ、詩は律呂の調音によりて顕る。画は見ることを得べき物体にして、詩は見る可らざる行為なり」と。

画と詩の区別をこれほど明確に述べた例は從來ないとして忍月は高く評価した。『ハンブルク演劇論』は独逸演劇を改良し戯曲の原則を固定した書である。当時ドイツでは仏国の戯曲を最良と考えていた。それは仏国の戯曲がギリシャ（アリストテレス）の原則を適用しているからであって、ドイツの戯曲もその影響を強く受けていた。レッシングは三一致（ドライアインハイト）の原則は必ずしも必要ではないとして、仏国戯曲の弊を鳴らした。そして英のシェークスピアは仏のコルネールより数等優れた悲劇作家であるとした。次いで代表的戯曲『ミンナ・フォン・バルンヘルム』と『エミリア・ガロッチイ』の特色と長所について述べ、最後にレッシングはエピグラムと小児談（ファーベル）にも長じていたことに言及した。そして結論として「之を要するにレッシング氏の全体全心総て是れ批評なり、真理なり、考察なり。当時の人々及び後世の人々が批評家、戯曲家、演劇改良家、文章家、詩人、哲人等の総て此等の栄称を氏に贈与する決して偶然に非ざるなり」と述べ、次の印象的な言葉で終わっている。

「現時我日本は恰もレッシング時代の独逸の如し。批評の時期正に迫りて而して未だ熟せず、演劇改良の時期正に迫りて而して未だ成らず。思ふて茲に至れば吾人レッシング氏を他邦人とは思はざるなり。否な第二のレッシングが吾邦に生ぜんことを希ふなり。嗚呼誰か吾文学界のレッシングたる者ぞ。」

忍月の「レッシング論」は鷗外が「レッシングが事を記す」（『しがらみ草紙』明24・5～9）で指摘するように、ケーニツヒの独乙文学史に依ったらしく、理解が不十分で解釈を誤った箇所もあった。だが忍月の論文は、日本での最初の纏まった本格的なレッシング論であるだけでなく、終わりにところでレッシングは他邦人のような気がしない、日本は第二のレッシングを必要と述べているのは、忍月の率直な気持ちの表白として評価してよい。

「独乙文学の三幅対」では、レッシングとヘルダーは共に審美学の標準を規定し、厳正で明晰な判断力を有した大批評家であったが、「レッシングは主として詩学形式の規則を探求し、ヘルデルは主として詩学材料の本質を撰択す。彼は意思非常に健全にして、此は性情非常に温かなり。…」などのように両者の本質を対比的に述べた。「レッシング譬論談」と「烈真具の比喩談」はファーベルとは如何なるものか翻訳して見せたもの。忍月はレッシングのファーベルはエピグラム（寓詩）と同じく児童の御伽噺というより、むしろ成人が読むのに適しているとした。

あれほどレッシングに傾倒し、自分の評論活動の拠り所となし、日本のレッシングを任じていたらしい忍月だが、同じドイツ派で語学力と理解力で勝る鷗外の華々しい活躍に押され、やがて文壇から離れていった。